

湯立神楽の意味と機能

遠山霜月祭の考察

鈴木正崇

Meaning and Function of *Yudate Kagura* :
The Reflection of *Tōyama Shimotsuki Matsuri* (November Festival at Tōyama Area) in Nagano Prefecture of Japan
SUZUKI Masataka

はじめに

- ① 祭の地域的展開と共通性
- ② 遠山霜月祭の特徴
- ③ 冬の到来
- ④ 起源伝承
- ⑤ 供物と湯立
- ⑥ 山と竈と土公神
- ⑦ 五大尊法と不動明王
- ⑧ 九字護身法
- ⑨ 立願と湯立
- ⑩ 死霊の鎮めと湯立
- ⑪ 湯立とは何か

【論文要旨】

長野県飯田市の遠山霜月祭を事例として、湯立神楽の意味と機能、変容と展開について考察を加え、コスモロジーの動態を明らかにした。湯立神楽は密教・陰陽道・修験道の影響を受けて、修験や巫覡を担い手として、神仏への祈願から死者供養、祖先祭祀を含む地元の祭と習合して定着する歴史的経緯を辿った。五大尊の修法には、湯釜を護摩壇に見立てたり、火と水を統御する禰宜が不動明王と一体になるなど、修験道儀礼や民間の禁忌意識の影響がある。また、大地や土を重視し竈に宿る土公神を祀り、「山」をコスモロジーの中心に据え、死霊供養を保持しつつ、「法」概念を読み替えるなど地域的特色がある。その特徴は、年中行事と通過儀礼と共に、個人の立願や

共同体の危機に対応する臨時の危機儀礼を兼ねることである。中核には湯への信仰があり、神意の兆候を様々に読み取り、湯に託して生命力を更新し蘇りを願う。火を介して水をたぎらす湯立は、人間の自然への過剰な働きかけであり、世界に亀裂を入れて、人間と自然の狭間に生じる動態的な現象を読み解く儀礼で、湯の動き、湯の気配、湯の音や匂いに多様な意味を籠めて、独自の世界を幻視した。そこには「信頼」に満ちた人々と神霊と自然の微妙な均衡と動態があった。

【キーワード】 神楽、湯立、霜月祭、コスモロジー、修験

はじめに

本稿は、神楽における仏教の影響を考察し、神仏習合を通じて独自のコスモロジーを表出していく諸相を、湯立神楽を中心として検討する。湯立とは、祭場に釜を据えて薪の火で湯を沸かし、神霊や仏菩薩を招いて笹や御幣で湯を献上し、清めや供養などを行う儀礼で、自らも湯を浴びて甦りを果たす。また、湯の動きを統御したり、湯を浴びて験力を顕示し、神がかり託宣によって神仏の意志を聴く。湯の動きで占いをすることもある。湯の様々な動きに神意の兆候を読み取るうとするのである。湯釜の周囲で執物とらひものを持って舞を演じ、仮面をつけて舞い踊るなどの芸能を伴う場合を、研究者は湯立神楽と呼んで考察してきた。湯立神楽の元来の主宰者は、修験、巫覡、神職、僧侶などで、禰宜や太夫とも呼ばれ、死者供養や祖先祭祀を含み、地元の祭と習合している。現在では湯立は神事の様相が強いが、かつては神仏混淆であった。本稿は、密教・陰陽道・修験道の影響を受けつつも独自の祭祀芸能を構築した遠山郷（長野県飯田市。旧上村と南信濃村）の霜月祭を中心に、従来の膨大な研究成果を踏まえつつ、中核をなす湯立神楽の意味と機能、変容と展開の動態を明らかにする。⁽¹⁾

三河・信濃・遠江が接する「三信遠」では、霜月（旧暦十一月）を中心に湯立神楽が盛んに行われてきた。遠山だけでなく、長野県天龍村や静岡県水窪町みずくぼの霜月祭や愛知県東栄町・豊根村の花祭はなまつりも同系統である。⁽²⁾湯立は伊勢・熊野・諏訪などの影響下で成立したと考えられている。特に伊勢は有力で、湯立神楽の発祥地とする説もあり（本田 一九七九）、中世には陰陽道の他に、両部神道や伊勢神道など神仏習合の思想や実践が展開し、伊勢猿楽も勃興して芸能の多様な展開がみられた。熊野は修験道の根拠地で、本宮・新宮・那智では中世以来、湯立に関する史料や

記録が残っている。⁽³⁾熊野と伊勢の祭神の同躰論も説かれ、⁽⁴⁾相互に関連が深い。中世以降、「三信遠」には伊勢・熊野などの神仏に関する解釈と実践が、修験・巫覡・僧侶・芸能者などを通じて天龍川に沿って移動して伝播し、諏訪信仰や地元の祭祀と融合しつつ定着し、独自の湯立神楽を形成したと推定される。奥三河の花祭の成立に関しては、江戸時代初期に豊根村古真立の曾川在住の修験・萬蔵院鈴木氏と弟子の林蔵院守屋氏の関与が明らかにされている。⁽⁵⁾湯立神楽は様々な職能者の実践と思考を取り組んで複雑化し、対象も神仏だけでなく山川草木に宿る霊から死霊・怨霊に至る広範囲の神霊との交流を通じて洗練されてきた。

① 祭の地域的展開と共通性

天龍川中流域の祭祀の概観と遠山霜月祭の位置付けを述べておく。この地域の大祭は、霜月（陰暦十一月）頃の農耕の収穫を感謝する霜月祭と、初春の五穀豊饒の農耕予祝祭に大別される。霜月祭が当年に収穫した新穀を捧げて神仏に感謝する「冬の祭」で湯立が主体であるのに対して、初春の祭では湯立は行わず農作業を演劇的に演じて見せる田遊びや田楽などの芸能を含む「春の祭」の様相が濃い。「冬の祭」の祭場は、遠山霜月祭は八幡社や諏訪社などの「神社」、奥三河の花祭では個人の「家」を宿とし寺院や神社との繋がりは弱い（現在は公民館が多い）。一方、初春の祭は、奥三河を主に広域に展開し（新野、西浦、黒倉、田峰、古戸、寺野、懐山等）、観音堂・薬師堂などの「村堂」（三日堂、八日堂などという）が祭場で、仏教儀礼「修正会」の結願の法楽の様相を呈し、農耕の模範的所作に農耕予祝の願望を託す。総じて、湯立は冬の行事で神社や家で行い、田遊びや田楽などの春の行事は村堂で行う。いずれも大きな仏教寺院は関与しない。仏教儀礼と芸能の関係性は、「春の祭」では修正会の最後に芸能が組み込まれて「接合」の形をとる

のに対し、「冬の祭」は作法や舞の中に仏教儀礼を取り込んで芸能の中に「融合」し、死者供養も加わる。遠山霜月祭は「冬の祭」の典型であり、湯に対する複雑な想いが多様な形で表出している。

天龍川中流域の湯立神楽を地域別（旧町村名標示）⁽⁶⁾でみると、以下の四つに分けられる。⁽⁷⁾

- ① 南信濃 天龍川東岸地区 長野県上村・南信濃村：遠山霜月祭
- ② 北遠州 天龍川東岸地区 静岡県水窪町・佐久間町
- ③ 南信濃 天龍川西岸地区 愛知県富山村、長野県天龍村・阿南町
- ④ 奥三河 天龍川西岸地区 愛知県豊根村・東栄町・津具村：花祭

天龍川西岸の奥三河の花祭の地域（④）は、舞が自己展開し、長時間かけて舞うことで陶酔に入り神霊と一体化していく。花祭は、花太夫が結界・湯立・鎮めなどを担当し、舞は宮人（旧開発地主層か）による儀式舞（楽の舞・御神楽・順の舞）、子供達による花の舞、青少年による舞（地固め・三つ舞・四つ舞・湯囃子）の三種に分かれ、年齢階梯に伴う通過儀礼、つまりイニシエーションの様相がある。⁽⁸⁾ 面は鬼を主体に山の神や土地の神霊が主役で、釜の周囲を廻って土地を譲り渡し、豊饒と子孫繁栄を約束する。「湯立が舞に従属する」形式で、特に湯囃子に顕著で、舞が主である。地域社会の特色は、山地斜面と河川流域に展開した開発に基づく枝村が基盤をなし、山村開拓の歴史に繋がると推定される宮人が主体で、外来系の花太夫が儀礼を掌握し、修験（熊野・白山）の影響が色濃いことである。その究極が大神楽であった。

天龍川西岸の南信濃の霜月祭の地域（③）は、富山村（大谷）、天龍村（大河内、向方、坂部）、阿南町（新野）などでは、「舞をして湯立を繰返す」ことが特徴で、舞は「湯立の為の清めの舞」となり、かつては立願の臨時祭も湯立として厳格に行われていた。究極には湯立そのものが目標であった。地域社会の特色は、古い歴史を持つ村が多く、奥三河に展開している開拓による枝村よりも、生活上の歴史的な継続性がある

ことで、オヤカタ層の力も強かった。儀礼の内容には花祭地域との共通性があるが、修験の影響はやや薄い。

天龍川東岸の北遠州の霜月祭の地域（②）は、水窪町（上村・草木）、佐久間町（今田・川合・峰・山室）で、「舞をして湯立を繰返す」が、面の造形は展開せず、オヤカタ層の家を中心とし、湯立には有力な家の先祖供養や死霊の鎮めの様相が強い。祭は村落統合の機能を果たすが、旧開発地主の権力の記憶も顕在化する。地域社会の特色は、村よりも、草分け筋の家が中心で、先祖や死霊の供養を通じて主従関係の権力性が再確認される。山地での生活は厳しいが、森林資源の活用によって富の蓄積が可能で、豊かな財産を持つ家が地域の指導権を握ってきた。湯立の要素は他の地域と共通するが、目的と機能は異なる。

天龍川東岸の南信濃の遠山霜月祭（①）は、舞よりも湯立が主体で、花祭とは対照的な性格を持つ。地域社会の特色としては、鎌倉期以来の荘園としての歴史を持ち、権力との関わりが濃厚で、江戸時代には遠山一族の虐殺に関わる御霊信仰が加わるなど、政治性を帯びていることである。秋葉街道という交通路を通じて文化交流が活発に行われ、町場の経済力を基盤として祭が維持されてきた。内容としては、神仏混淆で修験の影響があるが、儀礼の執行者は禰宜と呼ばれ、神道の儀礼の影響も色濃く残る。天龍川中流域の霜月祭の内容は、地域ごとに特色があり、歴史・経済・政治などの違いに応じて微妙に異なっている。

総じて、天龍川中流域の「冬の祭」に共通する特徴としては、①明治以前は神仏混淆が基本で、現在は大きく変容したが依然として神仏習合を維持する、②祭日は霜月の前半が多い（現在は新暦の十一月や十二月に移行）、③湯立を中核に組み込んで収穫感謝や死者供養をする、④自己の身体を清めると同時に生命力の更新を図る、⑤伽藍様、天伯、天狗、土公神、鬼など在地の神霊、大地の霊、土地神、山の神に対して強い畏敬の念を持ち、在地の古い形式で祀る、⑥自然災害や、共同体の飢

饑や疫病、個人の病気などの危機に対処して、「立願」の臨時祭を行って乗り越えようとする潜在力がある⁽⁹⁾、などを指摘できる。

霜月祭の目的は、民俗学者の見解では、暦の上では冬至に近くて日照時間が一年で最も短いので、太陽が衰弱し、人間の身体の生命力も感応して衰えるので、夜を徹しての舞に陶醉し、早朝に新たな太陽を拝むことで復活を確認するとされ、身体の再活性化が祭に託されたという。確かに地元でも天龍村の方向では「冬至祭」といい、冬至が意識されていた。しかし、個々の祭の名称は、霜月祭(遠山)、花祭(東栄町・豊根村)、冬祭(坂部)、御神楽(大谷)、もり祭(大河内)など多様で、各地の個性が強く表れ、内容も多義的である⁽¹⁰⁾。祭日は元来は陰暦霜月の前半、満月に向かう前の二週間に集中し、月の力の増殖に託して生命力の強化が行われた。湯立は太陽や月など自然の移り行きとの連動を意識し、天体の動きと人間の身体の感応を再確認して、身体を再活性化させて、活力を復活させる意図があった。この地域での湯立への執着は特別で、霜月祭では湯を浴びて生命の更新を実感し、その後には新年を迎える。湯立神楽は儀礼や舞だけでなく、祭場の切飾りに特徴があり⁽¹¹⁾、湯を沸かす釜上に神霊が降臨する千道を作り、湯の上飾りを吊り、「湯男」「湯女」(湯雛)などの人形の切紙に託して結界を強化する。湯が人格化されたともいえる。切飾りは単なる造形に留まらず、儀礼の意味や内容を表わし、神仏混淆を可視化して示している。

② 遠山霜月祭の特徴

遠山霜月祭は、一二月に入ると、遠山郷の一三ヶ所で行われる。谷の東北から西南へたどると、程野(八幡。諏訪も併祀)―中郷(八幡)―上町(八幡)―下栗(拾五社。八幡も併祀)―中立(稻荷)―八日市場(日月)―上島(白山)―木沢(八幡)―小道木(熊野)―須沢(八幡)

―和田(諏訪)―八重河内(八幡)―大町(天満宮)である。

内容は地域ごとに幾つかに類型化できるが、上町を中心として考える(表1)。祭は禰宜が執行し、実態は神仏混淆である。特徴は本祭の初めに、「神名帳」の奉読を行い、全国六十六国の一宮を読み上げて神々を「湯の上三寸」へ迎えることである。引き続き「申



図1 湯殿渡し〔出典『遠山霜月祭(上村)』2008〕
(以下写真は同様)

上」の奉読では神々に願い事をし、「湯殿渡し」(図1)に移行して梵天帝釈から富士天伯に至る神菩薩仏の名を唱えて湯に導いて「湯召し」となり、「先湯」七立の湯立へと展開する。祭の前半は勧請した神ごとに舞を奉納して湯立を繰り返す。釜の四方で舞い、舞処の分化はなく、釜の周囲に限定され、「湯立の為の清めの舞」である。ちなみに、遠山郷では「神楽」とは歌のことで、「御神楽をあげる」とは神仏への呼び掛けや呼び出しを意味する。宮清め、神迎え、御神酒上げ、湯立、神返しには「御神楽」があげられ、歌で神を招き、もてなし、送るのであり、歌の力に大きな信頼があった。構成は二元的で、首尾一貫した流れの中で展開し、延々たる神々の湯立が夜半過ぎまで続く。

上町の場合、「先湯」の七立の湯立は遠山一族への奉納とされて死者供養の様相が加わる。特に「先湯一 源王大神の湯」は重要な「役湯」で「湯開き」とも呼ばれ、遠山土佐守への奉納ともいう。先湯七立に対しては、式礼の舞として「四つ舞」が奉納されて、丁寧な扱いであ

表1 遠山霜月祭(上町)式次第(平成17年・2005)

期日	行事名(時刻)	内 容	
12月1日	湯木割り(8:00~)	湯木割り・酒女炊き	
前日 (12月10日)	準備(8:00~ 11:30~)	竈塗り・切りはやし、注連縄・釜蓋等道具作り 昼食 湯の上飾り・注連縄張り 夕食(精進の御飯) 子どもの舞練習	
	宵祭(19:00~)	一 座揃え(塩祓・切火・御座附の祓・六根清浄祓・五方祓・天地一切清浄祓) 一 大宮清め(あげのさ・おわき立て) 一 神ほぎ(身祓大祓・中臣祓・日待祓・産土神祓・御食祝詞・御酒祝詞・俗人之祓・一切成就祓) 一 酒女引神楽(三種大祓・宮清め・道清め・神迎え・酒女引・庭ならし・神返し) 一 神の舞 直会	
本日 (12月11日)	準備(6:30~ 8:00~)	朝食 お白餅揚き・湯の上飾り・御膳炊き・面迎え・釜洗い	
	本祭(例祭)(11:00~)	一 例祭(修祓・宮司一拝・開扉・献饌・献幣・祝詞奏上・祈願詞奉読・玉串奉奠・撒飯・閉扉・宮司一拝・直会)	
	本祭(古典祭)(12:00~ 13:00~)	座揃いの御神酒(昼食)	一 座揃い(塩祓・火入れ・御座附の祓・六根清浄祓・五方祓・天地一切清浄祓)
		一 大宮清め(あげのさ・おわき立て) 一 神ほぎ(身祓大祓・中臣祓・日待祓・産土神祓・御食祝詞・御酒祝詞・俗人之祓・一切成就祓) 一 酒女引(三種大祓・宮清め・道清め・神迎え・酒女引・庭ならし)	
	(14:30~)	一 神帳(宮清め神楽・神帳) あげのさ・八丁字立て・お白餅献上	
	(15:30~)	一 申上(釜祓神楽・申上・湯殿渡し)	
	(16:30~)	湯開き一升(御神酒)	
	(16:45~)	先湯(七立) ・先湯一 源王大神の湯(湯開き) <役湯> 御膳献上 ・先湯二 政王大神の湯 夕食 ・先湯三 両八幡の湯 ・先湯四 両八幡の湯	
	一 大宮清め 一 上げ湯 (初参り) 子どもの舞		
	~翌日 (12月第一 日曜日)	(20:00~)	湯の花(式礼・願)
	(21:00~)	・先湯五 住吉明神の湯 ・先湯六 日吉明神の湯 ・先湯七 淀の明神の湯	
	(22:30~)	一 四つ舞(式礼)	
	(23:00~)	一 津島明神の湯 一 鹿島明神の湯	
	(23:30~)	一 池大明神の湯 <準役湯> 一 諏訪明神の湯 一 交通安全の湯 一 七石の湯(願ばたきの湯)	
(1:00~)	一 御一門一升(御神酒)(ふたはらい) <役湯> 一 御一門の湯 きしめ上げ・お倉開き 八乙女の舞・花の御神楽		
(2:00~)	一 禰の舞 一 羽揃えの舞		
(3:30~)	一 鎮め一升(御神酒) <役湯> 一 鎮めの湯 こりとり(禊ぎ)		
(5:00~)	一 日月の舞・御座の神		
(5:30~)	一 面 神太夫・姥 八社の神(源王大神・政王大神) (先祀八幡・後祀八幡) (住吉明神・日吉明神・一の宮・淀の明神) 四面 富士天伯(水王・土王・火王・木王)		
(7:00~)	一 金山の舞 一 神送り 一 遊びのさ送り		
	片付け(7:30~)	片づけ 直会(朝食)	
翌日 (12月13日)	算日(8:30~)	算日	

[出典『遠山霜月祭(上村)』2008:40]

る。遠山一族への湯（神々とも混淆）の湯立が続く。その後は津島・鹿島・池大明神・諏訪の各湯立、交通安全祈願の湯立が行われ、いずれも疫病流行、大地震、洪水など共同体の危機や、林道開通の祝事などで始まった近代に生成した湯立である。そして、最後の七石の湯は「願ばたき」とされ、願が叶った感謝がなされる。

子の刻の「御一門の湯」で四面（水王土王木王火王）に奉納し、丑の刻の「鎮めの湯」で死者供養と共に全ての神霊を鎮めて神仏混淆の様相が強まる。その後八乙女の舞、花の御神楽、禊の舞、羽揃えの舞と「舞」が数番続く。日月の舞・御座の神で唱え事をして、日本国中の神々をお返し申す。『神名帳』で勧請した神々を元の場所に戻してから、仮面の神々が登場する。面は神聖視されて、被る前には水垢離の潔斎をする。こうした状況を考えると、遠山霜月祭の神霊は二重性を帯びていると言える。それは、『神名帳』という文字テキストの言葉で送迎される神（来訪神）と、仮面というモノと身体を介して出現して在地に止まる神（滞在神）である。夜もふけて朝に向かうにつれて雰囲気が開放的になり、明け方近い頃に一挙に面が出て「面形の舞」（神太夫・姥、八社の神、四面、富士天伯）となると、「よおっせ、よおっせ」と囃して荒れ狂い、神々と押し合いへし合いの狂騒状況になる。祭は別名を「かつぎ祭り」や「押し祭り」といい、解放感に溢れている。かつては男女が木の根を枕に寝る「木の根祭り」であった（花祭も同様の別称を持つ）。最後に天伯（上町は富士天伯。宮天伯ともいう）が出て素手で釜の湯玉（湯の花）を振り撒き、人々に力や聖性を分け与え、大地を踏んで弓矢で四方を射て悪霊を祓う（剣を使う場所もある）。その後の金山の舞で全てが終わる。天伯は五行の「金」に充当され、大地からの宝物、豊穰を恵む神の様相を帯びている。遠山祭の大きな流れは、「神楽＋湯立＋舞＋面」である。

遠山霜月祭の特徴は、花祭と比較して以下の点を指摘できよう。①遠

山は「神を勧請する度に湯立を繰返し行う」ことが特徴で、花祭が冒頭での「一回だけの湯立を基本にする」と対照的である。花祭は、最後に湯囃子の劇的な「舞による湯立」で村を越え世界の秩序を更新する大きな清めへと展開する。②遠山では前段で多くの湯立と素面の舞が続いて厳肅さがあり、後段で面形の舞がまとめて演じられて祝祭風になるといふ、静と動の対比が際立ち、首尾一貫した流れの中で展開する。一方、花祭は流れはあるが、鬼や翁や巫女などの面の舞は合間に組み込まれ、鬼は三種出るなど変化に富む構成である。③遠山では清めの舞は禰宜と役職者が主に担当し、面形の舞は村人が行い、最後の天伯の役は世襲という構成で、年齢階梯はさほど意識されない。花祭は、地固め、花の舞、三つ舞、四つ舞などの年齢に基づく様々な舞が奉納され、通過儀礼の様相が強い。④遠山は前半は神霊の清めの湯立が続き、後半で遠山一族などの死霊面が静かに湯釜を巡る行道を行い、夜半過ぎから神仏混淆となるなど、神から仏への転換が顕著である。⑤祭の主宰者は、遠山は禰宜（下栗は太夫）と呼ばれて、「神名帳」あるいは「神帳」を読むなど神道祭式が組み込まれるのに対して、花祭の主宰者の太夫は神仏混淆で、冒頭の祈禱と最後の神返しと鎮めを担当する。⑥「立願」に関しては、遠山では願が叶うと「願ばたき」で特別奉納の湯立を行うのに対して、花祭の立願では舞を奉納する（二力花、添え花）。遠山は湯立重視、花祭は舞重視である。遠山の特徴としては、死霊の鎮めが仏教儀礼の様式を混淆させる大きな要素になっていると言える。

③冬の到来

遠山霜月祭には、冬の到来を告げる季節祭としての性格が強い。祭事

の中で奉読し、全国の神々を勧請する「神名帳」の冒頭の神歌で、「冬来ると誰が告げつら北国の 時雨の雲に乗りてまします」と歌われるとおり、風と雲と雨に乗って神がやってくる。遠山は北の地蔵峠（鬼面山と尾高山の間）から南の青崩峠へと向かう谷で、方位では「鬼門から裏鬼門」であり、神霊が駆け抜ける「風の谷」の感覚がある。遠山は生業の基本である山を重視し、そこに潜む魔物に対抗し、森、木、石、湧水を祀ることで、山の暮らしを維持してきた。山の世界に大きな比重を置く生産に密着した信仰が根付いていたのである。

「峯は雪夜中はあられ里は雨 谷は氷の八重がさね」（かす舞・下栗）。高い山に雪が降り、里は雨、谷に氷がはる季節、麦が芽吹く頃、里芋の串刺しや御幣餅で「山の神講」を終えた後に、霜月祭の準備が始まる。祭は八重河内梶谷の一二月一日を初めとして、一二月一七日の大町天満宮まで、半月間にわたって行われる（かつては下栗が最後）。「山の神育ちはいづく奥山の そやまの奥の神にまします」「水の神育ちはいづく河下の 七瀬やしもの神の葉にまします」（十六の御神楽・木沢）。山神と水神を本源の地からサトへ呼び戻し村人と共に楽しむ。最後にヤマからタケへ高い山へ神送りして、「元の場所に鎮まる」ことを願う。タケとは遠くに聳える聖嶽・赤石嶽をいう。タケ―ヤマ―サトの三つの領域が自然認識の根源にあり、ヤマはサト近くの生活の場で森林資源に恵まれ、水源地でもあり、経済的にも精神的にも暮らしの根源である。神楽歌では「神はゆけモリは生まれこの里に また来る冬も神呼び返す」と歌われ、祭が終わると神は遠くのヤマに戻るが、サトにあるモリ（社・森・守）に止まるカミもいる。村人を守護する神は、「来訪神」と「滞在神」の二重性を帯びるのである。いずれにせよ、毎年、冬になると神々が訪れ人々と交流し、祭が終わると帰っていく。人々は「よいお年をお迎え下さい」と挨拶をして、新年を迎える準備に入る。遠山霜月祭は人々の生活のリズムの支えになっているのである。まさしく、遠山霜

月祭は年の終わりを告げる「冬の祭」で、自然の営みの循環を強く意識する。

遠山郷は閉ざされた世界ではなく、歴史的には天龍川を通じて外部との交流も盛んで、祭への影響も大きい。遠山霜月祭を構成する要素には、熊野・伊勢・諏訪・祇園などの多様な信仰の混濁がみられ、近世には秋葉信仰の影響も加わった。こうした多様な要素の混在と融合は、谷筋を秋葉街道が通り、沿道に町場が形成され、各所に旅籠が点在し、人と物と情報が行き交う場であったことに由来する。秋葉街道は、武家や商人や職人が往来するだけでなく、伊勢・熊野と秋葉・諏訪を繋ぐ修験や御師の通行路であった。また、天龍川の東岸に聳える山々は、修験の峰入り道で、熊野信仰の強かった南遠州から、本宮山―春登山―秋葉山―龍頭山―山住山（常光寺山）と伸びている。籠の意味づけや修法には修験の影響が色濃い。こうした複雑な信仰の様相を具体的に伝えるのが、上町に伝わる『霜月祭実録』である。その次第の中では、かつては「神名帳」を読む前に、「神迎えノコト」として、「謹請東方にわじの本富士浅間大菩薩并大日如来、西に八熊野三所大権現、南にわ伊勢皇両宮朝熊嶽福一萬大菩薩、北にわ浅間ヶ嶽農萬虚空蔵大菩薩雨ノ宮風の三郎諏訪大社法性大明神、中央にわ國々山々たけだけノ大天狗子天狗大小ノ神祇部類眷属まで、今日只今これの湯ノ上参途に謹請申奉と敬白」と唱えたとあり（『遠山霜月祭へ上村』二〇〇八・四七）、東西南北に富士浅間、熊野三所、伊勢朝熊、浅間諏訪を迎え、中央には全国の山や島の天狗眷属を勧請したという。外来と地元の信仰の融合を具体的に伝えている。霜月祭を行う神社の多くは、領主が勧請した荘園鎮守の八幡を祀り、祭全体に政治権力の影が落ちている。季節祭としての性格を根底に持ち、その上に多様な信仰が融合し拮抗してきた歴史がある。

④ 起源伝承

遠山霜月祭の起源は、熊野との関係、併せて富士浅間や八幡との連関も語られ、常に「外部」と結びついていた。上町の禰宜の宇佐美虎之助の談話では、朱雀天皇の承中年間（九三一〜九三七）の卯月半ば頃に老人がこの地に現われて一夜の宿を乞うた。老人は日本全国を修行する者が夜が明けたら、富士浅間大菩薩に向けて旅立つと告げた。翌日、老人は旅に出たが約半年後に戻ってきた。宿の主は佐久麻呂といい、老人はこの地は神を祀っていないのでお迎えして祀り込んで頂きたいと願った。老人は社を作り「木火土金水」の五神を勧請して祀り方も教えてくれ、農耕の守護神なので大切に祀るようにと告げた。これが、現在の「四面様」「天伯様」で、社は大木のもとで野天であった。(24)そして、荷物から奇妙な形の石を取り出して、富士のお山から持ってきたといった。(25)佐久麻呂は自分の先祖は京で宮仕えをしていたが、悪臣に貶められてこの地に逃れてきたと話すと、一緒に京へ上らないかと勧められて、京都に上った。老人は、宮廷の儀式や神社仏閣の儀式を見せ、最後に賀茂神社で竈を築き湯立を行う儀式を見てこれを覚えさせた。見るべきものを見て帰郷という時、老人は男山八幡を分霊して主宰神にせよといい、五個の面を持ちきたって、勧請した社に納めて湯立の式で祀ればよいといい、老人は正体を明かして「熊野本宮の仙人」だと名乗った。佐久麻呂は帰郷して男山八幡を正八幡として祀り、五個の面を納めて神前に竈を築いて湯立を行った。その後、佐久麻呂の先祖が元は宮廷に仕えていたという縁で、村の娘を年毎に一人二人と舎人采女として京に上らせ、儀式を見覚えさせて帰らせるようになった。その後には神社の位が上がり、官位が必要になり、京の吉田殿から神主たることを許された。そして、子孫が代々神主の位につくことになり、現在では宮元と呼ばれてい

るといふ。その後、建保元年（一一二一）に初めて正式な湯立神楽を執行し、神面の舞も合わせ行ったとされる。明応元年（一四九二）に大風で大木が倒れて祠が破損し、大宮を建立したのが文亀元年（一五〇一）で、その後は祭は宮の中で行われることになったという（『信州上村霜月祭』一九七二・四一六）。現在でも面形の最初の舞である神太夫の爺さんは「熊野仙人」を表わすとされ、四面と天伯は最後に登場するなど、祭には起源伝承の再現の様相がある。また、天伯の祠には「熊野本宮の仙人」が富士山から持ってきたとされる牛か羊の形のような石（溶岩か）をご神体として祀り、「金王」ともされる（一説では男山から勧請）（『遠山霜月祭』上村二〇〇八・二五）。併せて、山神と水神の石碑を二基祀る。また、地主神で最古の祭神とされる瀬戸神は、背戸神ともいい、熊野仙人が木火土金水の五柱と共に祀ったという。瀬戸が背戸であるとすれば、いわゆる「後戸の神」(『服部』二〇〇九)に近づく。「熊野本宮の仙人」を迎え入れた、佐久麻呂の子孫は、上町の栗下七軒衆として近年まで権威を保持してきたとされる。このように上町の霜月祭の起源伝承は、現在の祭との連続性を強く主張する語りである。

この伝承は、異人歓待による祭の発生、行者による神勧請、主神（四面・天伯）の面の由来、湯立の導入、竈と湯立の由来、陰陽五行の知識の導入、京都への参上と下向、吉田官位の授与、宮元の由来、野外から屋内への祭への変化、熊野信仰や富士浅間信仰との繋がりなどを語る。想像と記憶を綯い交ぜにした起源伝承であるが、地域社会の外部からの働きかけ、特に修験と見られる行者による外来の知識と儀礼実践がどのように地元に定着し、祭として根付かせて現在に至ったかを語り、歴史と伝承の連続性を主張して、現在の霜月祭の存続意義を明らかにしている。上町では、竈は天地陰陽を表し、一の釜は石清水八幡で先祀、二の釜は鶴岡八幡で後祀とされ、西方（京都）と東方（鎌倉）を向くように作る。(27)起源伝承に由来する石清水八幡（男山）と、莊園領主の守護神で

ある鶴岡八幡（鎌倉）の両八幡の合祀であり、公家と武家の歴史の融合を見るようでもある。竈は祭場の中央にあつて、宇宙全体を象徴する。

一方、南部の和田では祭は来訪した熊野の芸能集団が伝えたこととされる⁽²⁸⁾。ただし、和田の鎮守は諏訪神社で、遠山谷では総じて八幡が多く、熊野神社で霜月祭を行うのは上道木のみである。神歌では熊野は各地の御神楽でうたわれ、例えば上町の「しめひき」の「七種の御神楽」で、「熊野山きりべの王子椰の葉を かた背のかけて御座れ請ずる 伊勢の国ようだの森はむ鹿は 角を並べて御座れ請ずる」と伊勢と共に歌い込まれる。「切目の王子」（切部）は、熊野九十九王子の一つで花祭では主神である。遠山では八幡が基盤であるが、熊野や伊勢は社はなくとも、信仰の世界では大きな位置を占める。そもそも、天龍川中流域、特に遠山郷に大規模な湯立が集中する理由は、旧領主など支配者側の勧請した八幡社に伴う湯立の導入だけでなく、熊野―伊勢―諏訪を行き交う旅人の通路となつて各地の信仰と湯立がもたらされたからである。修験系の熊野、神祇系の伊勢、更に諏訪⁽²⁹⁾と八幡という四種の外来信仰の各々に湯立と神楽が取り込まれ、神仏混淆を基本にして、在地神の祭祀と複雑に融合して根付いた。遠山霜月祭の神観念は、「勧請神＋在地神＋自然の諸霊」で構成され、近世には遠山一族の死霊が「人格神」として加わつたのである。

⑤ 供物と湯立

起源伝承に語られるように祭の知識や技法は外来から齎されたとしても、地元への定着は日々の暮らし、特に生業を通して受容された。遠山郷では急斜面の山腹を切り開いて山畑を作り、麦・粟・稗・豆・蕎麦・蒟蒻を栽培し、かつては焼畑も行っていた⁽³⁰⁾。米は余りとれない。人々は生活の安泰・豊作祈願を主に、個人的には病氣直しを願つた。地すべり

や地震、日照りや洪水などの自然災害が多く、自然の猛威による不慮の災害への対処は、神仏や森の神霊に祈願し魔物を鎮圧する以外には方法はない。ひたすら「願」を掛け、成就すると「願ばたき」の湯立を奉納して信頼が維持された。担い手は男性で、参加は村人の義務であり、通過儀礼の様相を持つ。遠山霜月祭は、年中行事の収穫祭に、危機対応に関わる「願ばたき」が加わり、「年中行事＋通過儀礼＋危機儀礼」で成立している。

霜月祭は、秋の収穫物を神々に献じ神人共食する祭であるが、神霊との交流に欠かせない特別な供物に特徴がある。それはキシメ（生酒女）、御白餅（オヒヤシ）、御膳（御撰）の三種で、両親が揃つた不浄のない男性が作る役にあたる。いずれも、遠山郷では貴重な米から作られる⁽³¹⁾。このうちでも、甘酒のキシメが重視され、霜月一日（現行は二月一日）はキシメの仕込みで、新穀の米で醸す。キシメは「神の乳」とも言われ、特別な供物である。その仕込みは鉾り火が本来で、程野ではこの慣行が維持されている。キシメは上町では富士天伯社の前の「天伯様の前庭」で米を炊き、麴を混ぜて甕に仕込んで作る。御白餅はシトギから作る丸い重ね餅で、不浄のない男性が宵祭の晩に水で洗つた米一升をザルに入れておき、本祭の朝に石臼でひいて二五個作る。「お白餅と申るは天の八乙女がつきし餅なり」ともいい⁽³²⁾。遠山霜月祭（上村）二〇〇八・一一二、特別視される。シトギは在地の古い神霊への供物とされることが多い。御膳と呼ばれるご飯作りは、やはり両親が揃つた不浄のない男性が担当で、本祭の朝に社殿の外の「天伯様の前庭」で米一升を炊く。キシメと御膳をこの場所で作る理由は、最も清浄な庭だからとされ、野外に祀られて宮を守護する神や地主神の加護を得る。根源的な在地の神への捧げ物の意味合いがあり、古い様式を残すと見られる。

供物を献呈するのは「役湯」という重要な湯立の時である。「役湯」では禰宜を中心に五大尊を勧請して四方中央の五方を結界して魔障を除

く。五大尊の呪文を唱え、印を結び、神の舞をまう。上町では「役湯」は、先湯（七立）のうち先湯一（湯開き、源王大神の湯）、御一門の湯、鎮めの湯の三つで、池大明神の湯は「準役湯」とされる（表1）。「役湯」では禰宜を中心に五大尊を勧請して四方中央の五方を結界して魔障を除く。五大尊の呪文を唱え、印を結び、神の舞をまう。以下は各湯立に共通の「湯木舞」「湯殿渡し」「湯召し」へと続く。湯蓋を取る時は「子に臥し、寅に起き、卯に生じ、せんさらさらと煮え立つお湯は、神の御湯なり」と時の経過と共に湯がたぎる願いが籠められ、湯木で掻きまわす時は「お御影こそは、くんもと昇れ」と唱え、湯を召した神仏は雲となつて上がっていくことを願う。湯は人格化されて天上へと登っていくのである。

供物は重要な儀礼の時に上げられ、内容は決まっている。上町では先湯一（湯開き）の時には「御膳献上」で本殿・旧社頭・天伯の二十一社に献じ、御一門の湯の時は「キシメ上げ」で二十一社に献ずる。献上の時刻は「子の刻」と決まっていた。キシメ献上の唱え言は「神もしる神はもらさできこしめせ みもすず川の清き甘酒」である。また、「御白餅上げ」は「神帳」（神名帳）の時⁽³³⁾で、覆面した禰宜が二十一社に献じ、その後「申上」となる。上町での大役は、お白餅、キシメ、神帳、申上、湯の上飾りで、これに当たると面役など他の役は免除されるとされ「遠山霜月祭（上村）二〇〇八・一七」、神事での特殊な供物の重要度がわかる。また、キシメ、御白餅、御膳の三種と同様に、御神酒あげも重要で、本祭（古典祭）で「座揃えの御神酒」として献じる。その後「役湯」に先立って御神酒あげを行う。先湯の前に「湯開き一升」、御一門の湯の前に「御一門一升」、鎮めの湯の前に「鎮め一升」で、重要な供物として意識される。神霊への献饌とその後の共同飲食を通じて神霊と人間の双方の霊感を向上させている。

和田では、立願者は神子入りの式と舞の後に、神前で御神酒を頂いた

〔南信濃村史〕一九七六・六〇九〕。この時に「神の子」になった青年子女が飲むキシメは、「神の乳」と呼ばれたという（近藤一九三六・七一）。神の子供となつて丈夫になり、養育される時に飲まれる乳であり、新穀で醸したキシメを飲むことが「神の子」になる条件で、身体堅固が約束された。「生酒女」という漢字の当て字は女性の子育てを連想させ、生命を宿す酒の意味も含意される。

供物は神と人を結びつける重要な役割を担ったのであり、重要な湯立の「役湯」にあたって供物を献膳することは、収穫を神仏の恵みと感じ、感謝すると共に明るく年々の豊作を祈念する強い願いが籠められていた。上町では献饌の作法が特別に厳格である。

遠山霜月祭は外来の儀礼と接合し、湯立はその痕跡が色濃いが、供物には土地神を祀る在地の信仰が残り続けた。外来と在地の結合である。現在では、供物と湯立は密接に連関し、共に神霊との交流の核心である。仏教儀礼は在地の儀礼に深く入り込み換骨奪胎された。

6 山と竈と土公神

天龍川中流域の湯立神楽の祭場の特徴は、湯釜の周囲を土造りにした竈⁽³⁶⁾で、遠山の上町の場合は、竈は毎年新たに作り直す。竈の土は、周囲の山のうち、その年の「明きの方」、つまり恵方^{えほう}にあたる所から取る。八本の松生木は八つの尾根を越えて取ってくる。「竈塗り」は祭の前日に行い、釜に恵方から取った松の竈柱を「八字」形に打ち込み、「八絃の菜」を意味する。八は聖数として象徴的に竈の中に埋め込まれる。土を練って二基の湯釜を安定させて築く。恵方からとった釜土は一年の月数分とし、土玉は一年の日数分を作る。藁は天の二十八把で天の二十八宿を表し、三十六切れは地の三十六禽を表す。竈繩は十二月・十二支・天地日月・七曜九曜・二十八宿と観念する。祭場の竈は「山」に見立

てられる「遠山霜月祭の世界」二〇〇六・四四。『遠山霜月祭(上村)』二〇〇八：一九―二〇。竈と「湯の上飾り」を総称して「湯殿」といい、様々な造形が集う。「湯の上飾り」は、湯男、湯女(湯雛)、日月、人形、八ッ橋、花、千道、ひさげ(火提げ)、かいだれからなり、これらの切紙を総称して「十種神宝」にあたるという。内容は、沖津鏡・辺津鏡・八束の剣・生くる魂・足る魂・ちがえしの魂・死返しの魂・蜂の比礼・大蛇の比礼・くさぐさの比礼とされる。五間四方の舞処に注連縄をはり、各柱に榊をたて、本祭の朝に米と豆を半紙で包んだ「湯ふぐり」をつけ「生くる魂」を表す。切紙には、生命力の増進、再生の願いを籠め、男女の交合を連想させ、陰囊を示すなど性的な意味があり、蛇の比礼には生殖力を祈念する様相もある。竈と湯の上飾りを中心とする祭場には、時間と空間、天体の動きが凝結して封じ込められる。宇宙の根源を生成し、自然の精髓を取り込んで、生命力の源泉とする。

下栗の場合は、湯釜の上方にある煙出しの棟木に「三大山」と呼ばれる幣束二本を交差させて切りはやしに通し、階だれをつけたものを二組取り付ける。この中間から「十六天」と呼ぶタレをつけ、その上部に大天狗(火の王)・小天狗(水の王)という名称の「土玉」(藁すさ入り)を二個取り付ける。この土玉はかつては太夫が密かに作り、氏子は中身を知らなかったという。祭場の中央の上部にあつて、全ての運行を見守る天狗は山の神でもあった。火の王と水の王は、面形の舞では日天・月天として出現し(宮元と太夫が被る)、数珠揉み、印を結び(内獅子・外獅子)、湯と火を鎮める呪文を唱え、九字を切る(実際は四字)。かつては各々が「火せめ」「水せめ」を行い、「水の印」「火の印」を結んだという『遠山霜月祭(上村)』二〇〇八・三四八。いずれにせよ、根源に土、大地の力があり、自然の力を形象化し、人々と戯れ、加護を得ることで願いが成就すると考えられていた。

一方、竈の土に宿る地霊は、土公神ともなされた。土公神は元々は陰

陽道の神で、芸能との接合は中世に遡る。中世の伊勢猿楽は古代の法会で呪術的作法を主宰した「呪師座」の伝統を伝えていたが、文書に残る方固めの祭文は、結界して芸能の場に東西南北中の五龍王を勧請し悪霊を封殺する内容である⁽³⁸⁾。五龍王の祭文の五方は、五行思想と習合し、各方位の神が五人の王子として人格化され、争いをへて調停の後に、最後に中央の黄色で土にあたる五郎の王子、即ち土公神として鎮まり祀られるという土公祭文へと転換した⁽³⁹⁾。しかし、三信遠では中央に祀られる神は五郎の姫宮として女性化される。山―土―土公神―五行―五郎の姫宮―五龍王という連鎖で、大地や地下にわだかまる龍も地神と観念されて土公神と習合した⁽⁴⁰⁾。根源にあるのは「土」と「水」の合体である。

一般には、山に代表される大地の力を引き出して身体化し、土や水や火の力を統御する役割は、験力や法力を持つとされる修験や密教僧に委ねられ、仏教儀礼を取り込んで執行された。龍神や龍王の勧請による雨乞いや止雨の祈念は、修験や密教僧が頻繁に行っていた。上町では、湯を統御する湯木を禰宜に渡す時に、「天界龍王、地界龍王、中段国龍王と敬って申す」と唱え、水神として勧請する。土公神の祭場は五行や五方位の結界がなされ、勧請される五龍王や土公神は五大明王(五大尊)が統御する。結界作法が在地の儀礼に転換する時、農耕の基本は土と水であるから、「土の神」の土公神と、「水の神」の龍との結合は容易である。土公神は徐々に農耕の守護神として在地に定着し、家の中では土塗りのクドに祀られる竈神と習合して「火の神」の荒神ともなる。遠山はかつては焼畑農業が盛んで、危険を伴う山作業で「火の神」は重視された。また、町場での火事を予防する願いも「火の神」の信仰にこめられた。

奥三河の花祭の湯立では、祭場の中央に土塗りの竈を築いて湯釜に湯を沸かし、祭場を「山」と観念し、神仏の座所として、榊鬼は「山立て」の作法を行う。最後に行われる「鎮め」の足踏みの反問では「盤

古・大王・堅牢・地神・王」と踏んで土公神を祀る。「大王」は「大宝」とも書き、大地の宝である豊饒性を喚起する。一方で、悪霊を踏み鎮める意味もある。祭場の「山」は自然の形象化であるが、修験道では金剛界と胎藏界の曼荼羅と観想し、特に胎藏界と見なされると(熊野は胎藏界)、生命の根源である女性の胎内や、作物を生み出す大地の豊穰性に通じ、竈―土―土公神―山―胎藏界―女性の胎内という観念連合が生じる。土公神は中央に鎮まり、堅牢地神



図2 天伯の舞

方―お山―ちらし(一周)―舞くずし(五方―お山―ちらし)と展開し(『遠山霜月祭(上村)』二〇〇八:七〇)、舞の焦点は山にある。祭には多様な神霊が面形の舞として登場し、人々と神霊が一体となる。面形の舞は、神太夫、八社の神、末社の神、四面、天伯で構成され、四面は土王・水王、木王・火王天伯は金王で、五行にあてはめられる。五行は観念的過ぎるが、天地万物全てを祀ることで、根源には大地の再生と豊穰の願いがある。

と団体とされた。宇宙の創造神の盤古大王は、土公祭文では、生前に四人の王子がいて時空間を分割して均分に相続したが、天上に去った後に妃宮が生んだ五郎の王子が兄の四人の王子と所務を巡って争い、最後は調停役(博士)によって、四人が春夏秋冬、東南西北をとり、五郎の王子が四季の「土用」を十八日ずつ分与され、四土用の神として中央に地霊の土公として祀られる。ただし、天龍川中流域の霜月祭では、中央に位置し五行の黄色にあてられる五郎の王子は、「五郎の姫宮」として女性化され、大地の豊穰性が重視される。遠山郷では「五郎の姫宮」は領主が崇敬した守り神で、国入りの際に合祀したともいい(『信州上村霜月祭』一九七二:七―八)、別格扱いであつたらしい。大地の女神の変容であろう。

湯立では中央に「土」塗りの竈が築かれ、土公神が祀られ、水と火の和合による湯立を行って清めと再生が願われる。水は祭に先立ち「水迎え」でとってきた特別の水を使う。水と土、火や水を重視する背景には、焼畑や狩猟を営み、「山」を生活の資源の源泉として生きた人々の暮らしがある。上町では、舞の中で「山をめぐるのは山をめぐみて敬(ふるまひてまつす)白」という言い立てがあり、「神の舞」(産土の舞)は、礼式―五

最後に登場する天伯は「富士天伯」ともいい山と縁が深い。上町では社殿の外に祠があり、水神と山神も合わせ祀られている。宵祭と本祭の二度、旧社頭本社と富士天伯社に「あげのさ」として小幣を供え、引き続いて富士天伯社の前庭に「おわき」を立てて神勧請をする。祭の始まりである。そして、長い祭が極点に達した「面形の舞」の最後に天伯が面をつけて登場する。火伏せと湯切りで湯玉を飛び散らせ、特別な力を誇示し、弓をつがえて四方を結界し、最後に中央で矢を放つて魔物を追い払い、森羅万象を鎮めて荒ぶるものを懐柔する(図2)。そして、面をつけたまま、「叶」の文字を顔を動かして宙に書く。「叶う」ということは遠山霜月祭の重要な目的で、全ての願いの成就が保証されたことになる。天伯は世襲で伝えられる大役で、究極の「山の差配者」の様相を持つ。

一方、花祭では願いが「山の神」を形象する榊鬼に集約され、最後の湯囃子へ収斂し、清めの作用を宇宙へと拡大する。最後の「鎮め」では、花太夫が、龍王や、水の王・火の王などの面を被り、荒神と土公神を鎮め天伯を送る。何が究極の「山の差配者」となるか、地域により位置付けが異なる。しかし、根源には、「山」と人間がどのようにつきあ

うかという生活の要請が願いとして表出する。

⑦ 五大尊法と不動明王

遠山霜月祭では勧請と結界の作法や呪文が重視され、「役湯」と呼ばれる重要な湯立では、五大明王を勧請する五大尊法が行われる。上町・下栗・木沢では、禰宜が五大尊の印呪を結ぶ。禰宜は中郷・下栗では全ての湯立に数珠を持って対応する。上町では数珠を揉んで煩惱を滅却するのは「鎮めの湯」の時だけである(図3)。その次第は、以下の通りである(『遠山霜月祭(上村)』二〇〇八・七四―七五)。禰宜は左手首に数珠をかけ、新たに拝領した紙緒の草履をはいて竈の正面の莫座に着座する。御拝領の扇を開いて鈴を鳴らし、塩祓いで身を清める。火打を両手に持って「釜清め」の呪文(火内の呪文)を唱えて切火を行う。五大尊の印を結び、呪文を唱える。

謹請東方には降三世夜叉明王と申し、木の玉を持ちて前に立ちきり守らせ給う

謹請南方には軍荼利夜叉明王と申し、火の玉を持ちて右に立ちきり守らせ給う

謹請西方には大威徳夜叉明王と申し、土の玉を持ちて後に立ちきり守らせ給う

謹請北方には金剛夜叉明王と申し、金の玉を持ちて左に立ちきり守らせ給う

謹請中央には大日大聖不動明王と申し、水の玉を持ちて中に立ちきり守らせ給う。

そもそも頭には白金や黄金の烏帽子を召し、額には八葉蓮華の花をさかせ、目には百分の日月を宿し、口には阿吽の二字を含み、アピラウンケンの掌手を致し、もじを結んで肩になげかけ、腰におおば

くの縄を七重に巻き、足に絹帛の御靴を召し、しきの湯をばふまえしめたまう、月を蓑に日を笠に星を集めて鏡となす、火の中通れど燃えざらんこと、水の中通れどもぬれざらんこと、テンチクテン天の岩戸へ見え立ちかくれん事

(最後に秘密の唱え事あり)

袖下で、火伏せの「向獅子の印(伏せ獅子の印)」を結ぶ。起座して二拍手一拝、鈴を鳴らして立つ。これ以後、同様の所作を移動して七座で繰り返す。最後の七座目は最初の正面の座に戻る。ここで五大尊・袖下の印の後に九字を切る。右手で斜め縦横に九字を切るが、現在は五字でとめる。つまり、「臨、兵、闘、者、皆」までで、「陣、烈、在、前」は切らない。九字の後で数珠を揉みながら「九字を解く呪文」(オンキキャラハラハラ フタランバソワカ バサラダシャコク)である。これで五大尊の行を終了し「神の舞」を、礼式―五方―お山―チラシ(道中舞一周)―舞くずしの順に舞って終了する。

五大尊印を結び、中央の不動明王と一体となり、火を統御する。禰宜の装束は不動明王をかたどり、頭に烏帽子、肩に縛縄にあたる湯だすき、腕に百八の数珠、手に八握劍(八束の宝剣)にあたる湯木を持ち、湯殿の前で九字を切り、呪文を唱え、湯を立てる(『信州上村 霜月祭』一九七一…九)。湯釜を据える竈は「護摩壇」と観念すると言い伝えられる(『遠山霜月祭(上村)』



図3 五大尊印を結ぶ

二〇〇八・三一)。不動明王と同体になる作法は、修験道儀礼の「火生三昧」の民間への展開と言う事ができよう。竈に施された陰陽五行説の適用とも相俟って、修験の影響を色濃く残し、ある時期に解釈を施されたと見られる。

上町の結界作法では、塩で身を清め、火打ちで新たな火を起し、祓幣で不浄を祓い、五大尊を五方に勧請して、四方中央の五方を結界して魔障を除き、袖下では「前獅子の印」を結び、火伏せを祈念する。九字護身法で身固めを行い、九字を解く。そして、最後は神の舞で一体となる神仏混淆の作法を行う。中心の行法は、胎藏界大日如来の真言を唱え、大日如来の教令輪身としての不動明王と合体し、火にも水にも動じない身体になることである。禰宜は「水の玉」を持つ不動明王と一体になり火を統御するという遠山郷の独自の解釈が加わる。五大尊で結ぶ「独鈷の印」は、薬指を二本合わせて不動明王を表わし、他の指で四方の明王をかたどり、自らは中央の不動明王と一体化すると観念する。湯は通常の人間の能力を超えたものであり、危険性に富むので、統御は修験の技法に託されたのである。修験は山で修行して守護霊を獲得し、法力や験力を持つと信じられ、湯立作法は切紙の秘伝として、祈雨法、飛行法、剣渡法、陰形術法、不動金縛法、火生三昧法など同様に伝えられ、法力による特別な効果が期待された。禰宜は、修験の知識と実践を在地の儀礼と混淆させ、独自の結界や勧請の作法を作り上げたと言える。

五大尊法は、元来は密教の修法であるが、両部神道や修験道の影響が加わり、陰陽道に由来する土公神や五龍王の結界作法を包摂する形で、特別な湯立に対して適応された。湯は水と火、陰と陽の合体で、密教で言えば、金剛界と胎藏界の金胎一如を実現する。竈を山と見立て、曼荼羅世界と意味付け、五行思想を水と土の儀礼的使用と、水と火の陰陽合体による湯立の働きに結び付ければ、木と金の要素を加えて陰陽五行の

世界が実現する。最後に登場する天伯は五行では金に充当され、黄金に通じる豊穰をもたらすと観念される。また、湯立の中核である水と火の融合は、男女合体や陰陽和合と重なり、民間での豊穰祈願や作物の豊作に通じる。仏教儀礼は農耕儀礼と融合するのである。根源にある大地の再生の祈念の現前化・言説化・表象化にあたって、仏教儀礼は絶大な効果を発揮した。

⑧ 九字護身法

下栗の場合は、神仏混淆の度合いが強まり、数珠をほぼ常時使用し、「役湯」(式の湯、天王の湯、鎮めの湯)では、湯木に人の息をかけないように覆面が用いられる。本祭の初めの「座揃い」の「祓い」では、塩祓い、祝詞、神言、一切成就祓い、三種大祓い、天地一切清浄祓い、六根清浄祓いの後に引き続いて、般若心経が唱えられ、神仏混淆である。中郷、程野でも同様であり、上町とは微妙に異なる。下栗では湯立の際しての五大尊法はオコナイと呼ばれ、修行の意味が強い。ここでは禰宜よりも太夫という用語が使われ、各人がウシロガミ(後神)と呼ばれる守護神を持って対応した⁽⁴⁴⁾。下栗の場合、「拜礼、数珠揉み、二拍手一拜、印・呪文の繰り返し、火床と湯の清め、九字」という作法で印呪は厳格に行う。最初は獨古印(独鈷印。五大尊)を結んで、「謹請東方に降三世夜叉明王と申して 木の玉を持ちて前に立ち切り守らせ給え」、火の鎮めの呪文「火も水も 水皆水なれば清きかな アブラオンケンソワカ」、富士の水ぶせ(火)の呪文「八重の水をもって七重の火を消す アブラオンケンソワカ」と続く。以下、内獅子印、南方軍荼利夜叉明王、火の玉を持つ。火の鎮めの呪文と富士の水ぶせ(火)の呪文。外獅子印、西方大威徳夜叉明王、金の玉を持つ。火の鎮めの呪文と富士の水ぶせ(火)の呪文。日輪の印、謹請北方金剛夜叉明王、金の玉を持つ。

火の鎮めの呪文と富士の水ぶせ（火）の呪文。その後、中央大日大聖不動明王で水の玉を持つと観念して、九字（臨兵闘者皆陣烈在前）の作法に入り、左の懐で剣印、「この太刀と申すは……」の呪文を唱え、右手で剣印を結んで四字を、「臨・兵・闘」は左下・右下・左下へ、最後に「者」は前方に向けて切る。数珠練り、二拍手、一拜で終了する。上町と異なって九字の作法は「四字」で止める。

オコナイでは、胎蔵界大日如来の真言を唱え、五大明王を勧請し印を結んで結界する。大事なことは、九字護身法は実際には前半の四字（臨兵闘者）で止めて九字の全てを切らないことである。その理由を土地の人は、もし完全に行法を行うと、戻す力のない者は永遠に戻れない危険な状態に置かれる。それほど九字の力は強くと説明する。九字の印は威力が強いので、切り損ねたり、解き方を知らないといへんな事態に陥るといふ。

九字を全て切らず、途中で止めるという手法は、遠山の独自の思考のように思われる。九字は自然の力の統御に関わるが、人間は不完全な統御力しか発揮できなくても、自然とほよい調和を持って暮らしていくことが望ましいと考えているのではないか。人間が自然の全てを統御する力を持つたら、恐ろしいことになる。これは人間の思いあがり待ったを掛ける知恵なのかもしれない。自然の力を畏怖し、完全には支配しないという柔軟で謙虚な姿勢で臨めば、願が成就するという信頼関係に満ちた世界がある。

地震、大洪水、山崩れ、飢饉を引き起こす自然界の力に畏敬の念を持ち、神仏にすぎり調和と包摂の神仏混淆の世界に生きることが必然であった。自然からの体験知に学んだ修験や密教の技法や知識が、宇宙全体の均衡を保つためには有用である。圧倒的な力を持つ自然との付き合い方の答えの一つが、火と水の操作に関わる九字の制御にあると思われる。

9 立願と湯立

遠山郷やその周辺の湯立神楽の特徴は、豊作祈願を祈念し、地域の再生や個人の生命力の復活や悪疫退散を願うだけでなく、人々が神々に願掛けの「立願」をして、願が叶えば「願ばたき」で湯立を奉納する。面を奉納する慣習もあり、奉納者やその家族が永代にわたって面をつけて舞うことで神との誓いの証しとした。子々孫々まで「願」による神霊との結びつきを維持する。また、幼い子が生死の境を彷徨った時には「神子^{かみこ}」の願を掛けて健康に育つことを祈り、無事回復して十三歳の成人になると、本人は「神子」となって一生涯に互り祭に奉仕する慣行があった。新たに生まれ変わって一人前になったと観念され、通過儀礼の意味合いも伴う。ただし、「神子」の願掛けは少なくなり、中郷で一八五五年（昭和六〇）頃に行われたのが最後で、現在では掛けたことなしに「神子立願帳」を作って、神子上げの儀礼を伝承している（『遠山霜月祭（上村）』二〇〇八：二七五—二七六⁽⁴⁵⁾）。

願が叶った時の最も大きい「願ばたき」は臨時祭で、「宮神楽」「一旗^{ばた}」「釜換え」といい、霜月祭の全ての内容を再度、願主の負担でやり直すもので、個人でやると身上を潰すのでやたらにかけてはいけなさとされ、禰宜や親族は勿論、名主や組頭の立会いのもとで「願帳」という証文を作った（『遠山霜月祭の世界』二〇〇六：九〇）。天災や飢饉などのムラ全体の危機に際しても掛けられたという。霜月祭は季節の循環に従う年中行事の農耕儀礼の要素と共に、個人や共同体の危機を克服する臨時の儀礼の要素が大きく加わっていた。

臨時に願をかける方式は、遠山郷以外でも、富山村^{おわたにみかくら}大谷御神楽での「生まれ清まり」（産衣引、生衣引⁽⁴⁶⁾）や、天龍村の向方・大河内のお潔^{きよ}め祭での神子の願の湯立の「生まれっ子」など南信濃を中心に行われてい

る。奥三河の花祭では花の舞に痕跡を留める。大谷の「産衣引」では「ちはやふる神の世つぎに生まれきて 姿を変えて神を請じる」「人の子は産も育つも知らねども 今こそなるよ神の子に」と歌われ、村人の心情が籠められている。坂部の冬祭や大谷の御神楽は毎年の祭に「生まれ清まり」の一部を組み込んでいる。小さい頃から病弱な子供の場合、親は神仏に対して健康に生きられるようにと願いをかけ、願がかなえば「神子」として奉仕する。「生まれ清まり」「神子」「願ばたき」などにはこの地で生きる人々の生きざまが託されている。子供の死亡率が高かった時代、病氣直しや無事な成長を願うには立願以外の対応は考えられず、真剣な願いとなった。遠山では「神子の願」では「生まれるも育つも知らぬ人の子を かたぎぬきせて神の子にする」と神歌を歌い、不安定な子供のいのちの行方を神に委ねた。⁽⁴⁷⁾ 遠山では禰宜や舞子は「水干」という白木綿の上着を着るが、上町や中郷では襟首のところにイヌノヘラと呼ばれる三角形の布がついている。これは赤子が生まれた時に丈夫に育つようにと産着に付けるものだという〔遠山霜月祭「上村」二〇〇八・三二、一四〇〕⁽⁴⁸⁾。祭の衣裳を産着として禰宜や舞子を赤子に見立てるという感覚は、霜月祭に生まれ変わりを託す願いが込められていることの表れとも言える。

立願の中核に湯立があり、「タマの御神楽」と呼ばれるように、湯の動きや湯玉に生命力の現れを感じ取り、身体を再生させたり、新たな生命を誕生させる強い効果があると信じて、特別の願いを籠めたのである。湯の生命力に託して「神の子供」にするという慣行にその想いは強く表れている。湯はタマ（靈魂）であり、振りかけられると新たな靈魂を宿して再生する。神との約束は、御礼に奉納される湯立の奉納の「願ばたき」で確認され、独自の互酬性 reciprocity で支えられる。西欧由来の個人の内面の「信仰」 belief, faith ではなく、「信頼」 reliance の信であり、生活世界の実践に根付いていた。それが人々と神霊と自然の微

妙な均衡と動態を支えていたと思われる。

⑩ 死霊の鎮めと湯立

遠山霜月祭の中核には死霊の鎮めがあり、神仏混淆の湯立で対応する。上町の伝承では、樹下の小祠が大風で倒壊し、文亀二年（一五〇二）に大宮を建立して、正八幡宮、五郎姫宮、八王神と、日月木火土金水の七神を祀り湯立と舞を奉納していたが、元和八年（一六二二）に遠山一族八人の霊を合祀したという。百姓一揆で領主の遠山家一族の八人が殺害され、その後、疫病がはやり、飢饉が起こったので、怨霊の祟りを畏れて八人の霊を「八社の神」として祀った。⁽⁴⁹⁾ 明らかに御霊信仰で、京都の八所御霊と習合し、前に祀っていた八王神に取って代わった可能性がある。更に、領主が勧請した八幡神には、異敵退散や武神の相があり、御霊鎮めを託したとも見られる。上町の場合、竈を築く時に「八」が聖数として多用され、八本の松生木は八つの尾根を越えてとってきて、松の竈柱を「八字」形に打ち込み、「八絃の栄」を意味するか、「神帳」の最中に宮中の守護神の八丁字を勧請した八本の御幣を竈柱に立てるといふ伝承があり、遠山一族を祀る前に「八王神」も祀っていた。現在は遠山一族として人格神化している「八社の神」には重層性に富む神霊観が混濁している。⁽⁵⁰⁾ 現在では、御霊の様相を帯びた遠山一族を形象する面が登場すると、怨霊や死霊、祟りや怨念を畏れる心情が表出し、独特の重苦しさが漂う。支配者と民衆、オヤカタとコカタの主従関係など支配や服従に関わる権力の歴史の記憶がまといつき、権力の負の様相を引きずる御霊の記憶が蘇る。遠山霜月祭は周辺の祭祀とは異なる政治性を色濃く持つ。⁽⁵¹⁾

上町の湯立は、「先湯」七立、「神々の湯」五立、「願ばたきの湯」一立、「御一門の湯」一立、「鎮めの湯」一立から構成されているが、重要

な湯立の「役湯」は、先湯の一立（湯開き、源王大神の湯）、「御一門の湯」、「鎮めの湯」の三立で、「役湯」に先立って御神酒が上がり、五大尊の印呪を使用し、産土の舞（神の舞）が奉納される。上町では「鎮めの湯」だけに数珠を使用する。「役湯」は遠山氏の怨霊や死霊の鎮めと関わっている。

湯開きの「先湯^{せんとう}」は、「八社の神」の最上位にあたる「源王大神の湯」（遠山氏一族の土佐守あるいは遠江守）に奉納する。「御一門の湯」は、午前零時頃の「子の刻」に行われ四面の湯立とされるが、遠山一族への奉納ともいい供養の様相が加わる。「御一門の湯」は最古の祭神という瀬戸神や諏訪系の守屋の大神を祀ったという記録もあり古層の神に関わっていた⁽⁵³⁾。この湯立を境に祭の性格が徐々に変わり始めて民間の樂しむ祭へと変わっていく。真夜中近くの午前三時の「丑の刻」に「鎮めの湯」を行う⁽⁵⁴⁾。この湯立は数珠を繰って執行する「仏の湯」と言われ、死霊の供養や特定の神の湯立を越えた「森羅万象の湯立」で、自然界人間界の生きとし生けるもの全てが対象である「遠山霜月祭（上村）二〇〇八・八三」。「蝶類のこらずはう虫のこらずお湯召せ お湯召すときは雲とのほれ」と虫類を呼び集める。「釈迦牟尼仏 大日如来 阿弥陀仏 如来は残らず」と仏菩薩を呼び、禰宜は数珠を繰り印と呪文と九字、五大尊の唱えをして五大明王の守護を得て鎮める。舞は足の裏を見せず鈴の音も殺して舞う。摺り足の作法で反問に通じる動きである。最後の鎮めの呪文は、「禰宜が「川水神にお湯召する」と叫ぶと、周囲が「お御影こそはくんと昇れ」と三回繰り返し、その後で湯尻を切る。「しずかなれ しずかなれ 精しずかなれ」と激しく唱えて、釜の口を湯木で押さえ、「深山^{みやま}の百^{もも}しの精しずかなれ」と周囲で唱え、釜の縁上に二本並べ置く。森羅万象の鎮め、「湯伏せ」による怨霊・御霊の鎮め、祟りなす神霊や山や森に棲む荒ぶる神の鎮めなどで、全ての霊を鎮める。死霊の供養には仏教儀礼の修法を使用して法力によって鎮圧する意図があ

るとみられ、「鎮めの湯」はその極点で、神仏双方の力を総動員することで成就する。その後に、面形の日月の舞・御座の舞が登場する。

程野の場合は、湯立は一二であるが、「役湯」は「両大神の湯」「願湯」「御一門の湯」「鎮めの湯」の四つで、前半の二つの湯立では厳肅さが要求され、一般の氏子は社殿内側の「精舎」への立入を許さない。祭事執行の主役の禰宜と先達たちは、別火精進を維持する。子の刻の「御一門の湯」で神仏混淆となり、性格が一変して開放的になり、精舎への出入りが許され、中の者も精進を解く。この湯立は四面に捧げる「祭一番の湯立」で、竈の前で五大尊の修法、引き続き産土の舞、湯木の舞が行われる。所作や性格は「御一門の湯」の前後で異なり、この前の産土神の舞、湯木の舞、四つ舞は、竈をまわる「道中」では、扇で火床を「あおる」所作をしていたが、「御一門の湯」の後は扇と鈴を回して「火を切る」所作を行うのだという。「火起こし」から「火伏せ」へ移行し、「火」の意味が変化する（「遠山霜月祭（上村）二〇〇八・二五八」）。丑の刻に行われる最後の湯立の「鎮めの湯」は、神仏混淆の湯立で、笛の音もきわめてゆっくりとし、鈴の音を殺し、足の裏を見せずに静かに舞って、森羅万象全ての物を鎮めて慰撫する。最後に禰宜が呪文を唱えると、煮えたぎる湯も鎮まるという。引き続き面形の舞の部分を「遠山様の祭」や「死霊神の祭」と呼び、慰霊の様相を濃くする（「遠山霜月祭（上村）二〇〇八・二七〇―二七四」）。遠山霜月祭の転換点は靈魂が蠢くとされる子の刻を過ぎてからで、遠山氏を供養する神仏混淆の湯（上町や程野の「御一門の湯」、下栗の「眷属の湯」）で状況が変わる。死霊の供養は仏教儀礼の法力を借りて乗り越える。「鎮めの湯」で全てが鎮まると、一挙に開放的になり、面の神々が次々に出て押し合いへしあいして楽しむ。最後の神送りは丁寧^{ていねい}に元の棲みかに送り帰す。

下栗の場合は、「眷属の湯」が遠山土佐守と一門への湯立で、死霊を祀る最も大切な湯立とされた（「遠山霜月祭（上村）二〇〇八・三三四」）。た

だし、ここで言う眷属は広範囲で、稲荷様の狐、三峰様の狼、遠山氏一門と解釈に揺れがあり、複合的である。眷属とは主神についてきた諸々の霊で、死霊や動物霊など障りなすものが多い。この湯立の後は湯の花で家清めと宮清めをして、中破いとなって神返しをする。これ以後、雰囲気に変化し、「役湯」の「鎮めの湯」が行われ「静かなれ静かなれ精静かなれ 深山の百じの精も静かなれ」と呪文を唱えて全ての霊を鎮める。「百じ」とは古くは「百獸」と書かれ、狩猟の獲物たちへの鎮めと見られる。未だ帰らずに彷徨う森羅万象の霊に元の場所へのお帰りを促す。陰鬱と享楽に満ちた面形の舞が展開するのはその後である。下粟の祭はかす舞で神送りして、反問返しを行う。そして、祭の最後は木の根祭で、鳥居の傍らの木の株の下に赤い幣を立てて、「宮死霊・禰宜死霊」を祀ったという〔遠山霜月祭「上村」二〇〇八・三五五〕。

湯立は変化せずに伝えられたものではなく、常に時代に応じて変化してきた。近代にあつて上町は様々な出来事に合わせて新たな湯立を開始している。鹿島明神の湯は明治元年（一八六八）の悪疫流行時に開始、諏訪明神の湯は昭和二八年（一九五三）の大洪水の翌年に開始、交通安全の湯は昭和四三年（一九六八）に赤石林道が開通した年に開始している。また、鎮めの湯では、如来残らず、菩薩残らず、明王残らずに続けて「三世の諸仏、羅漢ギヤアティ、弘法大師、道元禪師、宗教、政治、学問、芸術、父方、母方、世界人類、魚類、鳥類、獣類、草木、植物、鉱物、書物、器械、衣食住、森羅万象、宮天伯、富士天伯」の鎮めを行う。森羅万象の鎮めとは、近代の新しい産業器械、宗教・政治、学問・芸術に至る、全ての鎮めであり、時空間を超えて自然と人間とモノとを包摂する柔軟な思考に基づいていた。

①湯立とは何か

湯立の根幹にあるものは何か。それは湯の動きに魂の働きを感じると感覚であり、神意の兆候を湯の中に様々に読み取るうとする。沸きたつ湯、立ち上る湯気、飛び散る湯玉、湯気による切り飾りの揺らぎなど、湯を巡る諸現象が、人間の感性と想像力を飛翔させる。

元々、湯立のタテ、タツとは現れることで、神霊の顕現を意味する。「せんさらさらと煮え立つお湯は 神のお湯なり」（大宮清め・上町）。煮え立つ音に生命力を感じ湯玉に聖性を見る。湯はタマと観念される。上町の「玉神楽」では、モトが「梵天帝釈、玉の御神楽」「梵天帝釈、日光月光」と歌い、以下、天神七代、地神五代、七曜九曜、明星方、二十八宿を唱え、各々のウラに「参らせる それ聞し召す」を唱える。最後は、「たまとるらんよ」「そーれのたほりや玉にほろー」で終わる。湯木の先を湯に軽く入れて、湯をはねる（下粟も同様）。タマをとるという表現には、湯玉の力で身体を活性化する願いが籠められる。更に、神は湯を召して湯殿で湯衣に着替えて湯あみし、雲に乗って上がっていく。神歌では「湯殿へ渡るな湯衣は 湯衣は綾か錦かな」（湯殿渡し・上町）、「お湯召す時の お御影こそはくんもと上れ。ヤンヤーハーハ」（湯召・上町）と印象に残るリズムで謡う。そして、湯自体が「湯男」「湯父」と擬人化される。湯を召したら雲となって上るという意味でもある。先湯の七立が終わると、「大宮清め」となり、「上げ湯」として湯を捧げ、「上げ湯こそ上げ湯こそ、神はよるこぶ上げ湯こそ」と歌う。湯を神霊に捧げることは清めと献上の二つの意味がある。

湯の一般的な効果は、夜半の始まりに行われる「願ばたき」（願いがかなった）の「湯の花」で村人に共有される。禰宜たちが釜の湯を竹筒に入れて各家を廻り、「家清め」をして祝い人々の幸せを祈願し、地域

の神社や祠の清めをして、共同体の中に湯の効果が浸透する。社殿の外の共同体全体に湯の効果を及ぼすのである。「火を切りて水を生ずる誰もよし 誰もよし皆清まれと祝いそめきよ」(お湯召・上町)。また、飾り物に関しては、釜の上の「湯の上飾り」の解釈は、湯男は「生くる魂・足る魂」、湯雛は蛇の比礼、人面は人形で「生くる魂・足る魂・死返しの魂・ちがえしの魂」、四方じめの柱の榊につける「湯ふぐり」は「生くる魂」を表わすという。湯にタマの働きを感じ、湯玉に生命力を見出し、湯を人格化し、湯の動きを神霊の顕現と考えることと連続している。これらの過剰な解釈は、ある時期に民間知識の体系化が行われた結果であるとしても、湯に対する感覚の表出として民間にも受け入れられる説明である。

湯という人間の統御を越える媒体と対峙するには、修験の技法がふさわしい。修験は、「精霊統御者」(spiritmaster「使霊者」[筑土 一九七六(一九四二)や「司霊者」[岩田 一九八三])として、「山」で修行して力を身体に宿し、儀礼では九字護身法を駆使して結果を作り、不動明王と一体になり法力で神霊を操作する。しかし、現在の遠山霜月祭の主宰者は修験ではなく、神道風の禰宜や太夫と呼ばれる村人である。ただし、その中にはかつては木曾御嶽の行者で神がかりの体験者もおり、戦前には祈禱禰宜と呼ばれる病氣直しや憑物落としを行う者もいたとされ、実態は限りなく修験に近い。遠山郷では自然の脅威や人生の不幸に対処するには、神仏や諸精霊の力にすがり、祟りなす怨霊や死霊の跋扈を鎮圧する必要があった。そのためには仏法の力が必要で、神仏混淆の儀礼を主宰する修験の技法は適格的であった。遠山霜月祭は外来と在地の儀礼や思想を混淆し、変形と解釈を加えて独自のコスモロジーを生成させ、その中核に湯立を据えた。湯は流動性に富み多義的なイメージを喚起させ、様々な現象を混融する媒体であり、意味の「乗り物」(vehicle)として、思想・儀礼・芸能の流動的な磁場を形成したのであ

る。

火を介して水をたぎらすという湯立は、人間の自然への過剰な働きかけであり、世界に亀裂を入れることで、人間と自然のはざまに生じる動態的な現象に注目することに他ならない。延々と続く湯立によって、湯の動き、湯の気配、そして湯の音や匂いに多様な意味を読み取り、真夜中になって禁忌に取り囲まれた面の神霊を多数に連続して登場させることで、独自の世界を幻視するのが遠山霜月祭であった。最後には神霊や仏菩薩、動物植物を含めて全てが元の場所に還る。かくして、人間と自然と神霊は関係性を新たに結び直して相互の信頼を回復し、人間の暮らしは安定して豊かさを取り戻す。

人間の霊魂もやがては自然に帰入する。山川草木全て物言う「いのちの循環」の中に、人間の霊魂も組み込まれていくのかもしれない。かくして、人間も自然の一部であることを自覚し、いのちを共感しあう世界が回復する。遠山霜月祭の中にはこうした普遍的な民俗知が隠されているのではないだろうか。

註

- (1) 遠山霜月祭の戦前の記録には〔近藤 一九三六、牧内・中島 一九七七(一九三三)〕があり、近年は桜井弘人の調査〔桜井 二〇〇二、二〇〇三〕と記録作成〔遠山霜月祭〈上村〉二〇〇八〕、〔遠山霜月祭〈南信濃〉①〕二〇一〇〕、〔遠山霜月祭〈南信濃〉②〕二〇一一〕、並びに映像資料が充実している。本稿はその成果に負うところが多い。遠山霜月祭を広く日本の祭祀芸能の中に位置付ける試みは〔鈴木 二〇〇六〕を参照されたい。
- (2) 花祭の研究は早川孝太郎〔早川 一九七一(一九三〇)〕、一九七二(一九三〇)〕が先駆的で、本田安次〔本田 一九九五(一九五四)〕が続く。戦後は〔武井 一九七七、渡辺 一九九〇(一九七九)〕、山本 二〇〇三、井上 二〇〇四〕などがある。
- (3) 本宮には源頼朝奉納と伝える建久二年(一一九八)四月二日銘の鉄製大湯釜が伝わる。熊野信仰と湯立神楽については別稿を参照されたい〔鈴木 二〇〇八、SUZUKI 2011〕。

- (4) 『長寛勸文』(長寛元年・一一六三)が典型で、「熊野権現御垂迹縁起」の初出でもある。
- (5) 武井正弘の精力的な調査で判明した(武井 一九七七、一九八〇)。苗字からは熊野と諏訪の影響が推定される。
- (6) 二〇〇五年一〇月一日、上村・南信濃村は飯田市、水窪町・佐久間町は浜松市、富山村は豊根村、津具村は設楽町に合併した。
- (7) 大井川流域の東川根村田代(現静岡市)のみさき神楽や本川根町梅津の御前神楽なども同系列である。
- (8) 通過儀礼の性格が、巨大な「大神楽」を生み出す原動力になったと考えられる。「人生三度」(二歳・十三歳・六十一歳)の大願を果たすことがこの行事の目的であったとされる(山本 二〇〇三)。
- (9) 奥三河で安政三年(一八五六)を最後に消滅した大神楽の開催年も飢饉の年であった(小林 一九九〇)。
- (10) 新暦採用後は、正月行事となったが、近年は一月や二月(旧暦一月にほぼ相当)に変更する所が増え、霜月に戻す意識が強まってきた。ただし、土曜日曜に行う所も増え、変化は加速している。
- (11) 切飾りを神楽の祭場に付ける慣行は各地に見られ、ザゼチ、ザンゼツやありもの、「四節」(宮城県の法印神楽)などという。東西南北、春夏秋冬、四方の神、結果、祈願、五大尊、五行などをかたじけなくと観念される。
- (12) 切り紙で作られ百道、八橋、ヒイナなど種類が豊富で、神降臨の道筋となると観念される。
- (13) 花祭地域では白開や湯蓋という。類似した装置は、各地で玉蓋、天蓋、白蓋、錦蓋、湯蓋、絹笠、大乗、梵天、造花、雲、あま、くま、ばっかい、びやつけ、まんがいなど多様で、伊勢では真床覆衾という。元来は仏堂の荘厳、仏菩薩の座所、天上世界、天孫降臨の装置であるが、葬送の祭具の一つでもあった。
- (14) 二〇一〇年一二月の祭を最後に休止に入った。
- (15) 地すべりによる災害を受けて中断した。
- (16) 二〇〇九年一二月の祭を最後に休止に入った。
- (17) 遠山霜月祭は、地域ごとに、上町、木沢、下栗、和田の四類型にわけられる(桜井 二〇〇一、二〇〇三)。
- (18) 別の解釈では「源王大神」は源頼朝で、次の「政王大神」は北条政子だという。遠山郷は鎌倉時代に鶴岡八幡宮(当時は宮寺)の所領となつて、八幡を勧請したとされる。源頼朝は地頭に梶原景時を任じ、記録にはないが地頭代も置かれたであろう。断片的な過去を想像力で補うことで生成された説と見られる。
- (19) 現在では立願は殆ど行われないが、形式上では上町では湯木を二倍にして、湯立を増やして、立願を取り込んだ形にする。下栗では注連縄を二重に、水迎
- えの子供を二倍に、面を二度出すことで立願とした。
- (20) 南信濃の新野の雪祭では、神楽も舞もない呪符による祈禱の願掛けの湯立が行われていた。
- (21) あおぐずれともいう。峠の頂上には守屋姓の者が居住し、代々茶屋を営んでいた。守屋は諏訪の神長官の家筋であり、諏訪信仰の伝播の様相を伝える。
- (22) 坂部には両部神道の伊勢浪人の定着を伝える記録が残る(『熊谷家伝記』二ノ巻、永享四年、一四三二)。
- (23) 遠州の南部には中世には那智の所領があり、遠州の横須賀には三熊野神社がある。
- (24) 『遠山霜月祭の世界』二〇〇六・八五)に文書として一部が掲載されているが、原文は公表されず、大意でしか伝わらないので、やや信頼性に欠ける。本概要は『信州上村 霜月祭』一九七二・二一七)に基づいた。何度か火災にあり、焼け残りの文書と聞きよるとされる。
- (25) 現在は、四面は「木火土水」、天伯は「金」にあてて。起源伝承は焼け残りの文書と聞きよるとされる。この時に土地神の「瀬戸神」を祀ったといい、現在も祀られている。
- (26) 上町の浅間神社のご神体という。現在の宮の守護神である宮天伯は「富士天伯」ともいい、石がご神体で溶岩と見られる。霜月祭にはキシメと御白餅を捧げて丁寧に祀る。天伯には、朝日天伯・夕日天伯・照王天伯などもあり(『遠山霜月祭』南信濃)②「二〇一〇・三三・三一」、自然の力の形象化であろう。
- (27) 鶴岡の勧請は鎌倉時代というが確証はない(武井 二〇〇〇)。先祀と後祀とは両八幡ではなく、遠山氏の老中二人で、江戸家老と国家老だという伝承が上町に伝わる。ただし、下栗では二つ釜は両八幡とする。木沢では外来のおだやかな神と在地の荒ぶる神を祀るといふ。
- (28) 和田の社は諏訪社であるが、承久元年(一一二九)再建の古い社とされる。
- (29) 上町の宮元は代々の神として、「守屋大神」を祀っている。青崩峠には古い守屋の家があるなど、諏訪の古い祭祀を司った神長官・守屋家の一族は伊那や遠山の各地に居住している。諏訪前宮で春に行われ狩猟儀礼を色濃く取り込んだ「大御幣祭」(西の祭)に鹿を奉納したのは遠山だという伝承もある。
- (30) 五大尊で火熱を冷ます「大根の重ね」は、焼畑の収穫物である。
- (31) 下栗では米が取れないので稗や粟などの雑穀から作った。
- (32) 中郷の「役湯」は上町と同じで、程野では「願湯」が加わり、「準役湯」は鹿島の湯になる。
- (33) 神帳の読み上げは厳粛であるが、下栗では祭場への持ち出しと退去にあたって舞がつく。
- (34) 花祭での「御神酒料」という神饌の饗応や、「花の舞」の湯桶の奉納と類似

- (35) 下粟では本祭の早朝にオヒヤシの「御白餅」をあげる。八日市場は「おんごの祭り」の面の終了後に、「面の弁当」として赤い紙に包んだ小豆飯をあげる。祝意を籠めた飲み物・食物で、古い食物の形態による供物を調べての献上で、普段は入手し難い米や小豆飯という非日常食を特別の供物とする。
- (36) 竈は一般にカマという。上町は松材を芯にした土製の竈に湯釜を据えるが、石芯粘土製（木沢・下栗）、煉瓦（小道木）、鉄製五徳（中立、八日市場、下栗和田）など様々である。
- (37) 細かい説明があり、湯男は生くる魂・足る魂、湯女は蛇の比礼をつけて交互に差し込む。人形は五つの人面で、生くる魂、足る魂、死返しの魂、ちがえしの魂を表す。八ツ橋は神が渡御する橋で蜂の比礼を表す。花は蛇の形を模して作り、蛇の比礼を表す。ひさげは三角形（火打）で湯釜の上で一つになり火が留まる。かいだれは木枠の四隅で比礼を表す。千道は四方張ともいい、四方にはられ中央に鳥居の形の切り抜いた比礼で神降臨の道を表す。
- (38) 五龍王（土公神）の由来を説く結界作法で〔天野 一九九五・四〇九〕、芸能との関連も深い。
- (39) 五龍王から五郎の王子への転換は〔岩田 一九八三〕に詳しい。筆者も備後の荒神神楽の考察から改めて、五龍王と土公神、土公祭文と荒神神楽について論じたことがある〔鈴木 二〇〇一・一九三二―一九三三、SUZUKI 2001〕。
- (40) 中世の龍のイメージについては〔黒田 二〇〇三〕が広範に検討している。
- (41) 吉田家から許状を買った時に正八幡宮（ほんだひなのこ）が広範に検討している。〔吉田家から許状を買った時に正八幡宮（ほんだひなのこ）を主祭神とし、木火土金水の五神を合祀し、その後五郎姫宮・八王神を祀ったともいふが信頼性には欠ける。〕
- (42) 竹竿の先につけたツトッコに「のさ」七本を差し、根元の地面に「末社のさ」五本を立てる。
- (43) 湯立には大量の薪が必要である。森や樹木には木の神がおり、天伯は金の神とされる。
- (44) ウシロガミは、式部様、根の神、天伯などである〔「遠山霜月祭（上村）」二〇〇八・三〇二〕。「天伯の湯」はウシロガミに対する湯立て禰宜の申し出に依りて立てた〔同・三三九〕。在地神や来訪神を後ろの守護神とする事例は〔「後戸の神」として芸能守護神の機能を持つ摩多羅神も含めた問題である〔鈴木 二〇〇一・二〇二―二六二〕〕。
- (45) 「神子立願帳」に「神呈として御禮の儀は願主中郷区氏子一同の安全祈願を給う。十二月に祭典に宮神楽を差し上げます」と書上げ、日光・月光・三社の舞・宮天伯を奉納する。
- (46) 十二・三歳の願人が神歌をうたい湯を分けてもらい振り掛けて、「市の舞」をまっている。
- (47) 上町では昭和四二年（一九六七）頃が最後で、八乙女の舞の前に「神子あげ」をして、「花の御神楽」となった。花祭の稚児による花の舞を連想させる。
- (48) 霊魂は頭の背後から出入りするとされ、子供の霊魂は簡単に身体から離れて、病氣や死を齎すとされるので、それを防ぐ封印の意味があると思われる。
- (49) 伝承では、元和八年（一六二二）に遠山遠江守景広の弟の遠山新助が大河原（大鹿村）で「石子詰め」になって殺害された。大河原と鹿塩には新助を祀る遠山八幡社があり、殺害は天正八年（一五八〇）だといふ。天正二年（一五七四）の郷民蜂起で、遠山一族が殺害された記録も残り、同姓同名の新助の殺害の話が混同されたらしい。熊野聖の布教説話の『続・鉦石集』（天正八年）第四巻「下末」一四話に、新助の殺害後に疫病がはやっただけで湯立を行うと新助の霊が現われ、高野山での追福を求める託宣が下り、供養すると治まったとある〔「遠山霜月祭の世界」二〇〇六・八七〕。高野聖や熊野聖の布教や唱導の意図が強く湯立の起源伝承にもなっている。
- (50) 上町の八社は、源王大神、政王大神、両八幡大神（先祀八幡と後八幡）、住吉明神、日吉明神、一の宮、淀の明神で、各々が遠山氏一族にあてはめられているが定説はない。土佐守景直・遠江守景重・江戸家老・國家老・遠江守景広・土佐景信・土佐守奥方・遠山景則に充当する説〔岡井 一九五六〕をはじめ、多様な解釈がある〔「遠山霜月祭（上村）」二〇〇八・二五〕。女神は一神である。
- (51) 「遠山祭」は、当初は遠山氏一門を慰霊する「遠山家の祭」という意味だったといふ。これに従えば、遠山祭の名称は近世以降に使用されることになったと言えらる。
- (52) 「準役湯」の「池大明神の湯」は、「片五大尊」といふ竈の正面のみの五大尊で、四方では行わない。各地で祀られる池大明神は、水源の神として重視されるが、役湯の神霊の次に位置づけられる。
- (53) 高神の湯立てともされ、『霜月祭礼実録』では「此の湯立ちは四天王乃湯と云ふて四面様から始め瀬戸神、守屋ノ大神、宮悉皆の湯立ち也」「火切なる行事」とされる〔「遠山霜月祭（上村）」二〇〇八・八〇〕。
- (54) 『霜月祭礼実録』は「志づめは正八幡ノ湯で神佛ノ湯といふ。森羅万象の湯立也」とする〔「遠山霜月祭（上村）」二〇〇八・八三〕。
- (55) 木沢の宵祭の「玉の御神楽」では、御神酒上げをして、一升瓶の酒の口の上で祓い幣を揺らす。これは神霊（タマ）の活性化に関わる行為かもしれない。

参考文献

- 天野文雄 一九九五「近世の伊勢猿楽」『翁猿楽研究』和泉書院。
井上隆弘 二〇〇四『霜月神楽の祝祭学』岩田書院。
岩田 勝 一九八三『神楽源流考』名著出版。
岡井一郎 一九五六「遠山郷「霜月祭」天龍文化新聞社」。
『熊谷家伝記』二ノ巻（永徳元年・一三八一〜永正八年・一五二二）、富山村教育委員会、一九八四翻刻。
黒田日出男 二〇〇三『龍の棲む日本』岩波書店（岩波新書）。
小林康正 一九九〇「奥三河の大神楽考（一）―神の子と呼ばれた人の世界―」『民俗宗教』第三集、東京、東京堂出版。
近藤政寛 一九三六『特殊神事の研究』第三輯（遠山祭の研究 下巻）、長野県神社協会。
桜井弘人 二〇〇二「遠山霜月祭の湯立てとその構造―上町タイプを中心として―」『飯田市美術館研究紀要』第二二号。
桜井弘人 二〇〇三「遠山霜月祭の湯立てとその構造―木沢・下栗・和田タイプを中心として―」『飯田市美術館研究紀要』第一三三号。
『信州上村 霜月祭』一九七一、上村。
鈴木正崇 二〇〇〇「巫女と男巫のはざま―神子と法者を中心に―」脇田晴子、アヌ・ブッシイ編『アイデンティティ・周縁・媒介』吉川弘文館。
鈴木正崇 二〇〇一「神と仏の民俗」吉川弘文館。
鈴木正崇 二〇〇六「日本の祭祀芸能における遠山霜月祭の位置」『遠山霜月祭の世界―神・人・ムラのよみがえり―』飯田市美術館。
鈴木正崇 二〇〇八「熊野信仰と湯立神楽」『宗教民俗研究』第一八号、日本宗教民俗学会。
SUZUKI, Masataka, 2001. "Le Chamamanisme Japonais en Transition", *Identities, Marges, Méditations: Regards Croisés sur La Société Japonaise, Études Thématiques*, No. 10, édites par Jean-Pierre Berthon, Anne Bouchy, Pierre F. Souyri, École française d'Extrême-Orient, Paris, pp. 225-249.
SUZUKI, Masataka, 2011. "Kumano Beliefs and Yutate Kagura Performance", *Shugendō: The History and Culture of a Japanese Religion, Cahiers d'Extrême-Asie*, No. 18, eds, Bernard Faure, D. Max Moerman, Gaylor Sekimori, École française d'Extrême-Orient, Centre de Kyoto, pp. 195-222.
武井正弘 一九七七「花祭りの世界」『日本祭祀研究集成』第四巻、名著出版。
武井正弘 一九八〇「奥三河の神楽・花祭考」『修験道の美術・芸能・文学Ⅱ』（山岳宗教史研究叢書）名著出版。
武井正弘 二〇〇〇「鶴岡八幡宮と遠山庄」『飯田市美術館研究紀要』第一〇号。
筑土鈴寛 一九七六（一九四二）『宗教文学・復古と叙事詩』（筑土鈴寛著作集 第一巻）せりか書房（復古と叙事詩―宗教文学の諸問題―）青磁社、一九四二の復刻。
『遠山霜月祭（上村）』二〇〇八、上村遠山霜月祭保存会。
『遠山霜月祭（南信濃①）（和田・八重河内・南和田編）』二〇一〇、飯田市美術館・遠山常民大学。
『遠山霜月祭（南信濃②）（木沢地区編）』二〇一一、飯田市美術館・遠山常民大学。
『遠山霜月祭の世界―神・人・ムラのよみがえり―』二〇〇六、飯田市美術館。
服部幸雄 二〇〇九「宿神論―日本芸能信仰の研究―」岩波書店
早川孝太郎 一九七一（一九三〇）「花祭 前篇」『早川孝太郎全集』第一巻（民俗芸能一）未来社。
早川孝太郎 一九七二（一九三〇）「花祭 後篇」『早川孝太郎全集』第二巻（民俗芸能二）未来社。
本田安次 一九七九「湯立神楽とその信仰」『講座 日本の民俗宗教』六（宗教民俗芸能）弘文堂。
本田安次 一九九五（一九五四）「霜月神楽の研究」『本田安次著作集 日本の伝統芸能』第六巻、錦正社（『霜月神楽の研究』明善堂書店、一九五四の復刻）。
牧内武司・中島繁男 一九七七（一九三三）「遠山の霜月祭り」『日本祭祀研究集成』第四巻、名著出版（『山の祭り』（伊那民俗叢書第一輯）山村書院、一九三三所収の再録）。
『南信濃村史』一九七六、南信濃村。
渡辺伸夫 一九九〇（一九七九）「生まれ清まり」の儀礼と歌謡』岩田勝編『神楽―歴史民俗学論集―』名著出版（早稲田大学演劇博物館紀要「演劇研究」第九号、一九七九所収の再録）。
山本ひろ子 二〇〇三「大神楽「浄土入り」―奥三河の霜月神楽をめぐる―」『変成譜―中世神仏習合の世界―』春秋社。
（慶應義塾大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月一日審査終）

Meaning and Function of *Yudate Kagura* : The Reflection of Tōyama *Shimotsuki Matsuri* (November Festival at Tōyama Area) in Nagano Prefecture of Japan

SUZUKI Masataka

Yudate is the boiling water ritual dedicated to *Kami* (deities) and *Hotoke* (Buddhas) based upon the combination of sacred water and fire. This paper analyses the meaning and function of *Yudate Kagura* consisting of dance, music and *Yudate*, held at Tōyama valley in November by lunar calendar. Tōyama is located on the mountain area in the southern part of Nagano prefecture of Japan. *Shinto* priests or *Shugenja* (mountain ascetics) has conducted these rituals on the occasion of annual celebration called *Shimotsuki Matsuri* (November festival) to activate the diminishing power of the sun and human body in the winter solstice. The topics to be discussed in this paper are local history, origin myth, syncretism of Shintōism & Buddhism, ritual process and status of religious practitioners. The main purpose is to make an interpretation of folk religion under the historical perspective. *Yudate Kagura* is conducted to express the gratitude for *Kami* and *Hotoke* to get the good harvest and make sure the future in next year. The villagers want to fulfill the vows of curing the disease, solution of unfortunate troubles and big accidents. *Yudate Kagura* is the spectacle to become into rebirth through the purification of the body by boiling water based upon the folk knowledge to live with the severe nature.

Key words: kagura, yudate, shimotsuki festival, cosmology, Shugendō